観光都市江戸の誕生とすみだ

安藤　優一郎（歴史家）

「江戸名所一覧双六」（部分）

観光都市というと、今も江戸時代も京都・奈良・大坂など関西の都市がイメージされるが、江戸の頃は江戸の町も観光都市としてたいへんな賑わいをみせた。

泰平の世である江戸時代に観光都市江戸が誕生していくなかで、現在の墨田区域は観光名所化し、観光都市江戸の中核となっていた。

江戸を訪れた観光客というと、地方から江戸にやって来た者がまず思い浮かぶ。「おのぼりさん」と呼ばれるような観光旅行者のほか、公用で江戸に出てきた者。例えば、参勤交代によって江戸詰めとなった勤番武士たちも、江戸観光を大いに楽しんでいる。

しかし、地方からやって来た者だけが観光客ではない。江戸に定住している者、江戸近郊地域に住む者も、その範疇に入る。地方出身者に加えて、江戸および近郊に住む人々も観光客として、江戸の観光名所を回遊していたのだ。

当時、広く利用された観光情報誌に「江戸見物四日めぐり」というものがある。それをみると、江戸の観光名所を東西南北に分けて、四日で歩いて回るコースが紹介されている。その起点は、宿屋が集中している日本橋近くの馬喰町になっている。

墨田区の観光名所が挙げられているのは、馬喰町から北や東に向かうコース。北方面で言うと、浅草御門→浅草寺→吉原→木母寺→新梅屋敷→向島→大川橋（吾妻橋）。東方面で言うと、両国橋→回向院→永代橋→深川（富岡）八幡→亀戸天神というコースが例示されている。

あくまでモデルケースではあるが、向島地域（木母寺・新梅屋敷・向島など）と本所地域（両国橋・回向院など）が観光名所として認知されていることが分かるだろう。

観光名所としては、芝居町、寺社、盛り場の三つが挙げられるが、墨田区の場合は寺社と盛り場ということになる。

寺社と言えば、現在でも盛んな札所めぐりがある。江戸市中の寺社を様々なパターンで回るものだ。御府内八八ケ所。山の手三三ケ所。江戸六地蔵などが代表的なものである。

なかでも、隅田川七福神巡りは現在でも人気があるが、これは向島百花園の佐原鞠塢が江戸後期の一九世紀に入ってから企画したもの。意外にも、隅田川七福神巡りはまだ二〇〇年ほどの歴史なのだ。

盛り場としては、両国橋たもとの両国広小路だろう。江戸で一、二を争う盛り場であり、飲食店のほか、芝居・見世物・相撲・揚弓場・落語・講釈・浄瑠璃・軽業・手品などを興行する小屋が立てられていた。回向院をはじめとする寺社境内にも娯楽・飲食施設が出店しており、境内が盛り場と化している側面もあった。

こうした観光名所の賑わいを支えたのは観光案内人だった。観光案内人は、宿屋が斡旋するのが通例だが、案内代は二五〇文前後（夜は一三〇文）。かけそば一杯が一六文であるから、その一五倍。一見高額のようにみえるが、案内人の需要は高かった。

観光客は数人単位で案内を依頼するのが普通だった。つまり頭割りであるから、それほどの金額にはならない。

さらに、案内人なしに効率よく江戸観光を楽しむのは困難という裏事情もあった。当時は正確な地図もない以上、地理不案内の観光名所を短期間に効果的にまわっていくには、案内人の存在が不可欠なのである。

江戸時代、京都・大坂・奈良・鎌倉といった観光都市に観光案内人が多数いたことは現在明らかにされている。だが、観光都市江戸にも、それと勝るとも劣らないほどの案内人がいたことは間違いないだろう。

彼らの案内人としての生活が成り立つほど、観光都市として江戸は発展していた。墨田区域の観光名所も、その恩恵を享受することでたいへん賑わっていたのである。

（平成22年度前期すみだ地域学セミナー　ご講演より）

「江戸名所一覧双六」（部分）